

いじめに対する態度と生活意識・価値観

鈴木康平*・田口広明**・田口恵子***

Attitudes toward Bullying in School and Way of Living and Sense of Values

Kouhei SUZUKI, Hiroaki TAGUCHI and Keiko TAGUCHI

(Received October 1, 1990)

On our previous study, we got the data concerning the perceived causes and various opinions of bullying in school by schoolboys and girls, sophomores, student-teachers and class-teachers.

We got interesting findings that in the case of analyzing the children's responses, permissible degrees of bullying have significant effects on the formation of opinion concerning the bullying by the above-mentioned subjects.

In this study, we would like to find out some relationship between the attitude or permissible degree of bullying and sense of values, the way of living, or the standard view of human being.

The subjects, elementary school children, junior high school boys and girls, sophomores and class-teachers were requested to show their own attitudes toward the nine different kinds of opinions on bullying and to answer the basic key-question about the degree of possibility of the eradication of bullying in school according to their own belief. Then, they responded their own sense of values, the way of living and their standard view of human being.

We could obtain the interesting relations between the attitude toward bullying and the way of living and standard view of human being.

問 題

筆者らはこれまで、いじめについての発達社会心理学的な研究を続けてきている(鈴木ら1986, 鈴木1986a, 1986b, 1987, 1989a, 1989b, 1989c, 鈴木ら1989a, 1989b, 鈴木1990, 鈴木ら1990)。そのアプローチとしては、小学生・中学生を主な対象として、質問紙調査法によるいじめの実態の把握、いじめ発生の時の当事者(いじめる方、いじめられる方双方)の心情、いじめをなくす方法

の子ども達なりの考え方等々をきくものと、将来、小学校、中学校の教師として学校教育に臨もうと希望している教員養成系学部にて在学している学生達の内いじめ発生の原因の推定といじめに対する取り組みの姿勢や、それを含めた学級経営の方策などを質問紙調査法により回答してもらうものであった。更に、現在、小学校、中学校の教師として活躍している最中の現職の教師に、いじめの発生のメカニズム、原因の推測、そして、現実にいじめ場面を発見または経験した時のいじめの実際上の対処の具体的方策などを詳細に報告してもらい、それらを分析・検討してきた。このような方法で、小学生から中学生、そして大学生にいたる児童・青年達の内いじめについての認識・対処の仕方についての検討を加えるなど、人間関係の発達の側面としての観点からいじめ事象の究明に取り組んできた。われわれは、このようなアプローチを続けていく途上で質問紙への回答をつぶさに検討したり、あるいは、子ども達と接触したり、大学生

- 1) *心理学科 **荒尾市立荒尾第一小学校 ***菊水町立菊水中学校
- 2) 本研究は、平成元年度科学研究費(総合(A)) (課題番号01301010)「価値観の形成とその規定因に関する社会心理学的研究」(代表・東京大学古畑和孝)のうち、分担課題「価値からの逸脱としてのいじめ-発達社会心理学的アプローチ」にかかわるものである。

達といじめについて語り合ったり、現場の教師と話を交えたり、更には、学会のシンポジウムでいじめ問題を取りあげたりして、懸命にその姿を追っているうちに、いじめに対するひとつの重要な考え方、認識が、いじめの原因の追究、対処の仕方、いじめそのものをどのようにみるかなどについての考え方のバラエティの背後にひそむものではないであろうかという考えに到達したのである。すなわち、いじめの根絶は可能と考えるか、不可能と考えるかといった視点がそれである。すなわちこの視点が、いじめに対する態度、いじめに対する許容度、更には、いじめへの対処の仕方に大きな要因となっているのではないかということである。この点を、基本的な仮説として、われわれは、ここ数年間、いじめ事象解決に取り組んできたのである。筆者らの一昨年あたりからの調査のデータが、いじめの心理力動、あるいは、教育実践におけるいじめへの対処の在り方に、何等かの示唆を提供するものとなりうるという方向を示しはじめてきたのである。

もちろん、われわれは、いじめを単なる子ども達の発達途上におけるある側面のあらわれ、あるいは、現今の社会情勢を反映した一種の心理現象とのみ捉え、それ（いじめ発生事象）を研究対象として冷やかにつきはなしてみようとしているのでは決してない。教育の実践にかかわるものの一員として、いじめの実態とその背景にある心理力動に少しでも鋭く迫り、この一連の研究を通して得られた知見をもとに、子ども達の内いじめによる人格の崩壊の防止や流すべくもない涙をくい止めようとする上での一助になればという強い願望を持って研究を続けているのである。さて、以上のいじめ根絶可能か不可能かという視点を軸に、われわれは、更に、いじめに対するこの認識がいじめについての一般的な態度に影響を与えているであろうことはもちろん、子ども達の日常生活における生き方、そして価値観、とりわけ生きていく過程・目標に対する価値意識、少々おおげさであるが人生観といったものと、これ（いじめ根絶可能、不可能の視点）がどのようなかわりを持つかを考えていくことにする。既に、筆者の一人鈴木は、1990年「いじめに対する態度と価値観—とくに小・中学生の場合」のテーマで小論を発表しているが、本報告では、更に調査対象の中学生を新たに、大学生を加え、そして、現職教師ま

でも含めたところに拡大して検討する。当然のことながら、質問紙調査票の内容は、相互に比較検討できるように、生活態度、人生観、生き方についての項目はそろえてあるが、中に、若干の項目において、小・中学生、大学生、そして現職教師それぞれの立場にどうしてもそぐわないところがあるので、それらの項目の内容はできるだけ同じ性質のものを指すように配慮しながら、表現をかえてある。

方 法

調査対象：小学生（4，5年生）212名（男子106名，女子106名）、中学生（1，2，3年生）152名（男子84名，女子68名）、大学生（2年）105名（男子44名，女子61名）現職教師 60名（男子）。
 教示者：小学校、中学校では学級担任、大学生、現職教師には筆者鈴木。

調査方法：質問紙調査法による。上記教示者による学級毎の一斉調査。現職教師は持ちかえり、記入後提出。

調査時期：平成2年3月～平成2年8月まで。現職教師や協力学級の都合のつく時に実施。

質問紙調査の構成の概要

- ・形式：無記名；自由記述，多肢選択，5段階評定尺度，順位づけ形式など。
- ・内容構成：（小，中，大学生向き）
 1. いじめられた経験の有無とその時の心情など。
 2. いじめた経験の有無とその時の心情など。
 3. いじめを見た経験の有無とその時の心情など。（以下は、現職も含める）
 4. いじめ根絶視の程度と、いじめについての9個の意見に対する賛成－反対の度合の測定。
 5. 日常生活の一端と人間観（性善説、性悪説）
 6. Sprangerの「生活の6類型」の提示による生活態度の把握（続有恒ら1959より）
 7. 青木誠四郎らの「生活の態度の6パターン」の提示による生活態度、生き方の把握（大西誠一郎1971より）
 8. 続有恒らの「幸福にとっての必須要因」の提示による幸福観の把握（続有恒ら1959より）

結 果

データの整理にあたっては、「問題」のところでも述べたいじめ根絶視の程度を問う質問項目をkey項目とみだてて群分けをおこなう。それは、

次の通りである。即ち、小・中学生用の質問項目④、大学生用の質問項目⑤、現職教師用のそれは⑥に、10個のいじめに対する意見が記述されていたが、その中の意見項目「いじめは人間のいるところ必ずあり、決してなくなりません」に対して、「おおいに反対」か「まあ反対」にチェックした被調査者群を「いじめ根絶可能視群」(POと略記)、「どちらともいえない」にチェックした被調査者群を「中間群」(MDと略記)、「おおいに賛成」か「まあ賛成」にチェックした被調査者群を「いじめ根絶不可能視群」(IMPと略記)とする。なお、いじめに対する各種の意見や生活態度、人生観、価値観などに関する項目のうち、5段階評定尺度形式のものへの応答は、そのまま、それをその該当項目への得点とみなし、それを基に、平均、標準偏差等の算出をすることにする。

いじめに対する態度

いじめ根絶可能視の程度による群分け、つまり、いじめ根絶可能視群PO、中間群MDと、いじめ根絶不可能群IMPの3群を基にして、いじめに対する9つの意見についての賛否の程度をきいたところを概述する。これは、すでに、われわれが、これまでの研究(鈴木1989、鈴木ら1989)で発表したところと、今回得られた資料との間に非常に強い類似の程度がうかがえたので、ここでは、その概要をのべるにとどめる。

すなわち「いじめは人間として情けない行いである」とする意見に対しては、PO、MD、IMP群ともに、反対の意向が強く、すべての群の平均が4.00を上回っている。有意差はなかった(根絶視(3)×所属集団(4)の独立した2要因の分散分析による。さらに、平均値間の多重比較は、Tukey法による。以下、同様)。次に「いじめは悪いことだけれど、もともと人間のこころのなかにある気持ちだから(いじめがあっても)しかたがないことです」という意見に対してはPO群がもっとも強く反対し($M=1.76$)、MD群がそれに続き($M=2.23$)、IMP群が反対の意向が最も弱く($M=2.61$)その傾向は有意であった($F=19.773$, $df=2/517$, $p<.01$)。「いじめはいじめのわけがしつかりしているときは(いじめを)ゆるされます(いじめてもよい)」については、3群ともに反対の意向が示され有意な差はなかった。「いじめは人間の自然のおこないで、よいとか悪

いとかの問題ではありません」についてはPO群が最も強い反対($M=1.75$)、MD群がそれにつづき($M=2.06$)、IMP群がもっとも強い反対($M=2.16$)を示した($F=5.364$, $df=2/517$, $p<.05$)。「いじめは人間として最低の行いです」については、3群の平均値間に有意な差はなく、全て、賛成の方向に傾いていた。「いじめは人間の自然な行いでいじめられる方がそれによってかえって強くなっていくので、よいところがあります」については、PO群が平均1.82と強い反対、MD群が平均1.26とつづきIMP群のそれが2.43ともっとも弱い反対を示している($F=11.541$, $df=2/517$, $p<.001$)。ついで、「いじめは悪いことですが、いじめられるほうもそれによって強くなっていくのだから、必要などころもあります」については、PO群の平均が1.96、M群が2.22、IMP群のそれは2.52と、これまた、いじめの必要悪についても、いじめ根絶可能視群がもっとも強い反対を示し、以下、MD、IMP群とつづいた。「いじめはどんなわけがあっても許されません」の意見に対しては、3群間の有意差はなく、概ね賛成の意向が示された。

「いじめは悪いことですが、いじめられるほうにも悪いところがあるはずだから(いじめがあっても)やむをえません」については、PO群の平均が2.12、MD群の平均は2.56、IMP群は2.78とこれも、反対の意向が、PO→MD→IMPの順に強から弱へと移行していることが顕著に示された($F=14.991$, $df=2/517$, $p<.01$)。

これらは、従前のわれわれの得た資料と非常に類似していることは前にも述べた通りであるが、PO、MD、IMPの群分けの背後にあるいじめに対する考えが、非常に深い意味をもっていることを暗示するものであることを裏付けているように思われる。

いじめ根絶視の程度と生活意識 および人間観・人生観など

これについては、まず、調査項目の番号において、小・中学生の質問紙調査票では④、大学生用では⑥、現職教師は⑥に相当するところをみていく。

(1)「クラスのきまりを作るときなど皆が賛成するならば自分は反対でもそれに従う」(大学・現職教師用:「集団の規約を作るときなどは皆が

賛成するならば自分は反対でもそれに従う」) これについては、3群間に10%の有意水準で有意な傾向がみられた(ここでも、前節と同様の独立した2要因(根絶視(3)×所属集団(4))の分散分析による。表1-1および表1-2を参照)。それらは、それぞれ、PO群の平均が3.34、MD群が3.22、IMP群が3.52であり、MD群がそれにやや賛成の傾向で、PO群、IMP群と、それに続い

たらうれしい」(大学生用:「クラスのだれか(親友でない人)が大きな成功をおさめたらうれしい」)(現職教師用:「職場の同僚が大きな成功をおさめたらうれしい」)については、PO群の平均が3.51、MD群が3.30、IMP群が3.18と平均値が徐々に下降している($F=3.051$, $df=2/517$, $p<.05$)。これは、PO群がもっともそれを強く喜び、MD群がそれに続き、IMP群がそれに対す

表1-1 いじめ根絶視各群の日常生活

所属	項目 群	[1]多数決		[2]家の人と話す		[3]認められている		[4]他の人幸せそう		[5]友の成功を喜ぶ		[6]友の失敗を悲しむ		[7]性善説	
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
小学生	PO	2.82	1.14	4.06	1.03	3.11	0.76	3.17	0.81	2.87	1.29	3.44	0.99	3.87	1.11
	MD	2.75	1.16	4.16	0.84	3.12	0.82	3.08	0.82	2.82	0.96	3.33	0.90	3.29	1.13
	IMP	2.85	1.28	4.22	0.92	3.10	0.70	3.12	1.12	2.28	1.26	3.14	1.11	3.54	1.26
中学生	PO	3.17	1.01	3.51	1.19	3.10	0.79	3.07	0.81	2.98	1.20	3.05	1.13	3.85	1.10
	MD	3.40	0.97	3.69	1.04	3.07	0.71	3.24	0.68	2.90	1.33	3.31	1.04	3.79	0.91
	IMP	3.36	1.12	4.33	1.28	3.15	0.66	3.03	0.97	2.92	1.12	3.08	0.92	3.97	1.05
大学生	PO	3.73	0.83	4.06	0.98	3.70	0.63	2.97	0.63	3.82	0.90	3.67	1.04	4.15	0.82
	MD	3.33	1.11	4.00	0.91	3.29	0.84	3.04	0.74	3.46	0.96	3.38	0.99	4.25	0.78
	IMP	3.88	0.73	3.71	1.14	3.42	0.70	3.31	0.96	3.56	0.73	3.69	0.71	4.17	0.80
教師	PO	3.65	0.91	4.45	0.50	3.85	0.48	2.85	0.73	4.35	0.57	3.80	1.25	4.40	0.74
	MD	3.38	0.95	4.24	0.75	3.71	0.63	3.05	0.38	4.00	0.76	4.00	0.87	4.19	1.00
	IMP	4.00	0.86	4.53	0.50	3.84	0.59	2.74	0.71	3.95	0.69	3.95	0.89	4.32	0.73

て賛意度が、やや上向いていく様子が示された($F=2.795$, $df=2/517$, $p<.06$)。

ついで、(2)「学級であったおもな出来事は家の人に話す」(大学・現職教師用:「家の人達とのコミュニケーション、意思の疎通を大切にしている」)については、3群間に有意差はなく、平均4.00の前後でそのような傾向が強いことを示している。

(3)「自分は学級では皆から認められている」(大学生・現職教師用:「自分は大学では友人から認められている」)については、3群間に有意な差はなく、中程度の認識が示された。

(4)「自分のまわりの人々はたいして自分より幸せそうにみえる」については、すべての群が平均3.00程度を示し、これも、中程度にそのような認識していることが伺えた。

(5)「クラスのある人がとてもよい成績をあげ

る喜びが低いことを示している。

(6)「クラスのある人がとても大きな失敗をしたら悲しい」(大学生用、現職教師用も(5)の「成功」の語句が「失敗」に入れ替わっているのみ)については、3群間の平均に有意差はなく、各群とも3.40あたりを中心に、ややそのように感ずると回答していることが見いだされた。

(7)「人はもともと(生まれながらに)よい心を持っている。」(大学生・現職教師用は「生れながらに」の箇所が「先天的に」の語句になっている)については、3群間の平均に有意差はなく、総平均は3.98であり、ほぼ賛成の気持ちをどの群も表しているといえる。

(8)「人間は、もともと(生れながらに)悪い心をもっている。」(大学生・現職教師用は「先天性に」の語句を用いた)については、根絶視(群)の主効果が有意であった($F=7.744$, $df=2/517$,

$p < .01$). PO群の平均が2.74, MD群が2.99, IMP群が3.33と, PO群がこれに対してもっとも強い反対を示し, MD群がその反対の程度がやや減り, IMP群では3.33と, どちらかといえば, この考え, つまり, 人間は生れながらに悪であるとする考えに賛意の方向がやや伺える程度の応答を示した.

(9)「苦しいことにあえてたちむかう」に対し

ては3群間に有意差はなく3群の総平均が3.51でややそういう傾向を皆もっていることが示された.

(10)「友達みんなとなかよくしていくためならば, 自分のしたいこともしないがまんする」については3群の平均値間に有意差はなく, 総平均3.29と中程度(どちらともいえない)の反応を示している.

(11)「友達みんなとわいわいさわいで遊ぶより

・人間観等への応答の平均値・標準偏差

	[8]性悪説		[9]苦難に		[10]友のため		[11]ひとりだけで		[12]仲間はずれ		[13]異質排除		人数
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
	2.35	1.38	3.59	0.99	3.15	1.18	1.70	1.01	1.78	1.01	2.43	1.10	54
	2.64	1.17	3.81	0.87	3.35	1.00	1.92	1.07	1.96	1.01	2.42	1.01	77
	2.75	1.38	3.69	1.13	3.15	1.02	1.88	1.18	2.05	1.15	2.35	1.12	81
	2.71	1.29	3.39	0.79	3.12	0.97	1.51	0.86	1.73	0.83	2.68	1.09	41
	3.21	1.04	3.40	0.84	3.17	0.97	1.76	0.87	2.33	1.12	2.60	0.94	72
	3.54	1.24	3.67	0.83	3.08	1.12	1.90	1.08	2.23	1.07	2.69	1.20	39
	3.00	1.13	3.21	0.91	3.21	0.98	2.21	0.77	2.00	0.99	1.94	0.95	33
	2.71	1.21	3.04	0.74	3.68	0.64	2.46	0.87	1.92	0.70	1.79	0.64	24
	3.67	1.09	3.02	1.05	3.27	0.81	2.29	0.71	2.42	1.06	2.02	0.75	48
	2.90	1.38	4.10	0.54	3.66	0.79	2.30	0.95	1.99	0.85	2.10	0.94	20
	3.38	1.33	3.71	0.70	3.33	0.78	2.33	0.89	2.62	0.90	2.38	0.65	21
	3.37	1.31	3.53	0.88	3.37	0.93	3.05	1.05	2.79	0.83	2.47	0.82	19

表1-2 表1-1にもとづく独立した2要因の分散分析 (F値を示す)

変動源	項目	[1]	[2]	[3]	[4]	[5]	[6]	[7]	[8]	[9]	[10]	[11]	[12]	[13]
	df	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F
A(群)	2	2.795 [†]	1.421	1.289	0.351	3.051 [*]	0.056	1.176	7.744 ^{**}	0.441	0.993	4.258 [*]	8.319 ^{**}	0.382
B(所属)	3	14.655 ^{**}	6.576 ^{**}	21.475 ^{**}	1.958	36.167 ^{**}	11.618 ^{**}	10.548 ^{**}	5.691 ^{**}	11.317 ^{**}	2.415 [†]	16.634 ^{**}	4.901 ^{**}	9.558 ^{**}
A×B	6	0.986	2.382	0.661	1.000	0.761	0.942	0.603	1.137	1.616	0.971	1.489	1.256	0.805
誤差	517													

[†] $p < .10$ ^{*} $p < .05$ ^{**} $p < .01$

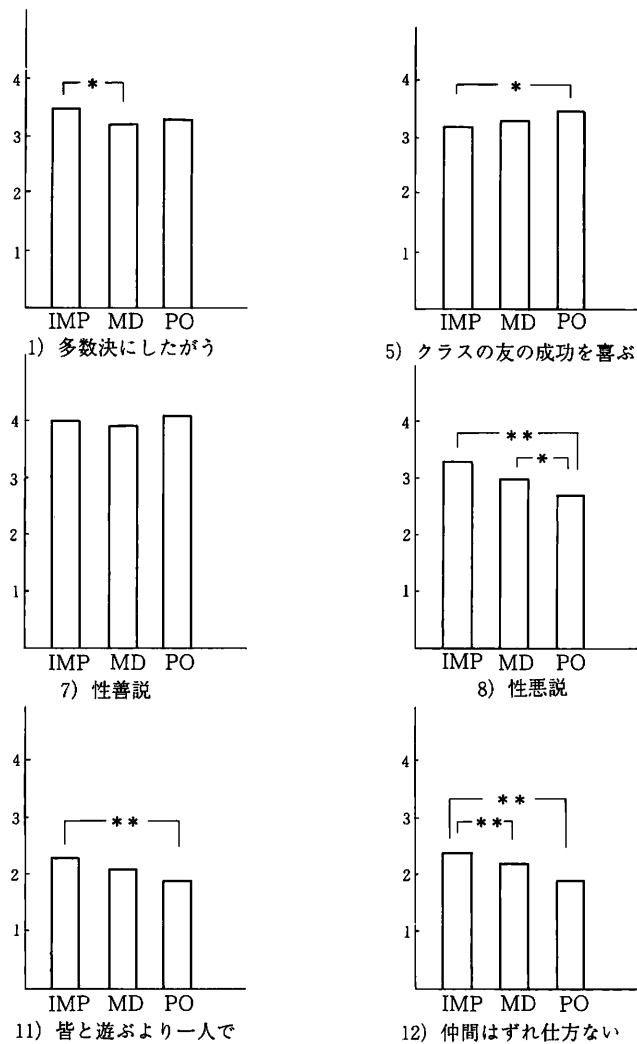


図1 根絶視各群の日常生活・人間観等への応答の平均値
 [註]: 各項目への得点幅は5~1点. 高得点の方がその項目内容への賛意度強い

一人でファミコンをしている方がよい」(大学生・現職教師用:「友人とわいわい騒いで遊ぶより自分の趣味に没頭している方がよい」)については、根絶視(群)の主効果が有意であった($F=4.258$, $df=2/517$, $p<.05$). すなわち、PO群の平均が1.93, MD群は2.12, IMP群が2.28で、PO群がこの傾向が最も弱く、MD群がややその傾向を出しはじめるところがみられた。

(12)「仲間にとけこまない人は仲間はずれになっ

てもしかたがない」についても、根絶視(群)の主効果が有意であった($F=8.319$, $df=2/517$, $p<.01$). すなわち、PO群の平均は1.88, MD群は2.21, IMP群は2.37と、これまた「仲間ずれ」を仕方ないとする傾向がIMP群にやや強く、MD群は中間、PO群はこのような考えに最も強く反対していることが明らかになった。

(13)「皆とちがうことをする人は許せない」については3群の平均値間に有意差はなく総平均

2.32と全体的に反対の傾向を持っていることがうかがえた。

(以上の資料の内、根絶視群の主効果が有意あるいは有意な傾向がみられた5つの項目と有意な傾向はみられなかったが、“性悪説”と対になってよく扱われる“性善説”にたいする応答のそれぞれの平均値を図示する。図1参照)

さて、これまでみてきたどちらかといえば具体的な日常生活の態度、意識とくらべて、やや包括的で、目的意識を内包している性質をもつ、生き方・人生観の類の項目に対する応答のあらましにふれておく。これらは、Sprangerによる生活意識の6類型と、青木誠四郎による人生の目標を内包した生活態度・生き方の6つのパターンであり、この調査票では、小学生、中学生用において調査項目⑥と⑦、大学生用で、⑦と⑧、教師用で③と④に該当する。

これらいずれの項目に対しても、ここではいじめ根絶視の程度と直接深いかかわりをもつ応答は得られなかった。むしろ年齢別の要因の方がこれらの生き方のパターンに深いかかわりのあることが示された。

考 察

いじめ根絶視の程度と、いじめに対する9つの意見への応答つまりいじめに対する態度とは、密接な関連があることが、われわれのこれまでの調査でうかがえたのであるが、ここでも、再びその傾向が確認されたといえよう。いじめ根絶視に対する考え方が、いじめそのものに対しての鍵となるものを秘めているように、当初は直観的に感じとり、われわれの研究における重要な要因として導入したものであるが、このように資料による裏付けがえられてくると、その背後にあるものは何かについて、より深く考察したい念に強くかられる。

さて、その、いじめ根絶視の程度と生活意識、人間観、価値観などとは、どのようなかわりが、見いだせたのであろうか。前述のように、「クラスのある人がとてもよい成績をあげたらうれしい」に対する応答で、根絶可能視群が、そのように思う程度が高く、以下中間群、不可能視群とそれへの賛意の程度が降下していることが、見いだせたこと、「人間は、もともと(生れながらに)悪い心をもっている」との考えに対して、PO群がど

とらかといえば、反対、MD群はどちらともいえない、IPM群はやや賛成との有意な傾向が見いだされたこと、つまり性悪説とでもいえる考えにこのような応答傾向がみられたことは、どのように解釈したらよいのであろうか。ここでの資料のみから、いじめ根絶視と性悪説を結びつけてみたり、その因果関係を推定することは、早計にすぎる。「いじめ」といい、「悪い心」といい、あまりにもばくぜんとした、広汎すぎる概念であり、個々の被調査者の心の中にえがかれた両用語についてのイメージの幅が極めて広いものであることに留意しておかなければならないからである。

また、友達とわいわいやるよりも、一人である方がいいという趣旨の意見項目にたいしては、PO群がもっとも反対の意向が強く、MD群、IMP群とそれが弱くなっていくこと、更に、「仲間にとけこめない人は、仲間はずれになってもしかたがない」に対して、PO群がもっとも強く反対、MO群がそれにつづき、IMP群はそれへの反対がもっとも弱かったことにも注目しておきたい。一方、「皆とちがうことをする人は許せない」という“異質の排除”については、3群とも反対の意向が示され、それら平均値間に有意な差がなかったことは、人間存在の多様性を許容し、個性を認めあいながら、寛大に人間関係を展開していく精神のあらわれと見たい。

なお、Sprangerや、青木の生活態度の類型に対する応答の傾向やパターンについては、今後さらに資料の分析・検討を深めていきたいと考えている。

謝 辞

本研究の遂行にあたり、調査にご協力くださった小学校、中学校の教師、児童・生徒の皆さん、そして教育学部の学生諸氏に厚く御礼申し上げます。また、本学部助教授篠原弘章氏によるコンピュータ・プログラムを使用させていただきました。記して感謝の意を表します。また、資料整理の補助者として積極的に助力してくれた本学部心理学専修学生諸氏にも心から感謝します。

文 献

深谷和子編 1986 いじめ—家庭と学校のはざま—現代のエスプリ No.228

- 古畑和孝 1985a “いじめ”の構造を探る 学習指導研修 8 (2), 42-48.
- 古畑和孝 1985b 現今の教育問題と社会心理学よりの提言—日本社会心理学会特別報告—児童心理 39(16), 195-204.
- 古畑和孝 1986 「いじめ」問題再考—鈴木康平・小倉寿男両氏の問題提起を受けて—学習指導研修 8 (11), 45-48.
- 稲村 博 1985 いじめの心理と病理 ジュリスト No.836 23-28
- 桂広介・長島貞夫・真仁田昭・原野広太郎編 1985 いじめを超える！—105 人提言集—児童心理 39 (13)
- 森田洋司 1985 学級集団における「いじめ」の構造 ジュリスト No.836 29-35.
- 文部省編 1984 小学校生徒指導資料 3 児童の友人関係をめぐる指導上の諸問題 大蔵省印刷局
- 文部省編 1985 生徒指導資料第 2 集 生徒指導の実践上の諸問題とその解明 大蔵省印刷局
- 西日本新聞社社会部取材編 1985 弱者いじめ 西日本新聞社
- 篠原弘章 1984a 行動科学の B A S I C 統計解析 ナカニシヤ出版
- 篠原弘章 1984b 行動科学の B A S I C 実験計画法 ナカニシヤ出版
- 篠原弘章 1989 行動科学の B A S I C 第 5 巻 ノンパラメトリック法 ナカニシヤ出版
- 鈴木康平・佐藤静一・篠原弘章・吉田道雄 1986 いじめの社会心理学的研究 熊本大学教育学部附属教育工学センター紀要 3, 97-115.
- 鈴木康平 1986a “いじめ”の背景・動機・対策・学習指導研修 8 (11), 34-39.
- 鈴木康平 1986b いじめの心理—原因・動機と指導—日本心理学会第50回大会発表論文集 S.38
- 鈴木康平 1987 現代社会といじめ再考 教育心理 35, 762-767.
- 鈴木康平 1989a いじめに対する小・中学生の認識 熊本大学教育実践研究 6, 61-81.
- 鈴木康平 1989b いじめに対する教育学部 2 年次生, 教育実習生, 現職教師の認識 熊本大学教育学部紀要 人文科学 38, 257-270.
- 鈴木康平 1989c いじめに対する態度 九州心理学会 第 50 回大会発表論文集 129-130.
- 鈴木康平・田口広明・高木恵子 1989a いじめに対する原因の認識(1) 日本グループ・ダイナミックス学会 第37回大会発表論文集 129-130.
- 鈴木康平・田口広明・高木恵子 1989b いじめに対する意見と原因の認識(2) 日本グループ・ダイナミックス学会 第37回大会発表論文集 131-132.
- 鈴木康平 1990 いじめに対する態度と価値観—とくに小・中学生の場合—熊本大学教育学部紀要 人文科学 39, 285-302.
- 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1990 いじめに対する意見と原因の認識 熊本大学教育学部紀要 人文科学 39, 303-317.
- 詫摩武俊 1984 こんな子がいじめる, こんな子がいじめられる 山手書房